



あやめだより

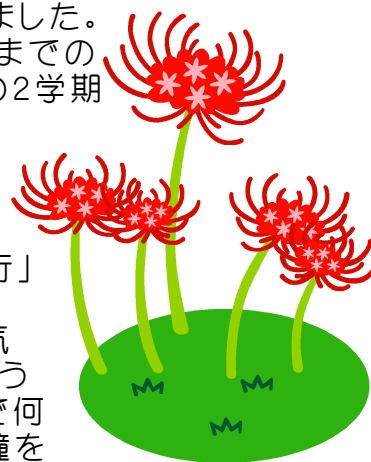
令和2年9月号

コロナ禍の2学期が始まりました！

長岡南小学校長 勝呂 義弥

コロナ禍の16日間の短い夏休みが終わり、2学期が始まりました。8月24日からの2学期は、臨時休校等がなければ、12月25日までの91日間になります。当初の計画の冬休みを1日少なくした形の2学期になります。

この2週間の夏休みは、どのように過ごされましたか。コロナの第2波といえる感染が全国に拡大し、毎日1000人以上の感染者数が報告されていました。この報告を目にするたび、2学期以降の大きな行事、例えば「自然教室」「修学旅行」「運動会」などを実施することができるのだろうか大きな不安が押し寄せました。また、コロナだけでなく、浜松では、気温が41.1度という国内最高気温を記録する日もあり、刺すような酷暑の中で、熱中症の脅威にもさらされました。地球規模で何かが起きているのでは、人間に対して怒っているのでは、警鐘を告げているのでは、と感じているのは私だけではないと思います。



この夏休みは、不要不急の外出を控えたので、テレビを見る時間が多くありました。特に、終戦に関する番組をいつもの年より見ました。今年は、終戦から75年の節目の年です。コロナの影響で戦没者の追悼式や慰霊祭等の行事も中止や縮小されました。「戦争の記憶の継承が年々難しくなる中で、追悼を通して歴史を共有する機会が奪われてしまった」「コロナ禍に直面した社会の混乱は、戦時下の不条理を見るようである」「苦い敗戦を経て、私たちが獲得したものは何だったのだろうか」「この75年の間に『教訓』が真に根付いていないのではないか」「買い占めによって枯渇したマスクを政府が「配給」し、感染が広がる都市部から、感染者の少ない地方へと「疎開」が相次いでいる」などの声が聞こえました。「戦争を知らない世代」が8割半ばを占める時代に、「コロナ禍」を「戦争」と比べることはいかなものかと思いますが、戦時下との類似性を感じずにはいられません。

社会の中に不安が高まれば高まるほど、強い統率や介入を待望しがちな意識が芽生えます。また、排除思考も強まります。世の中に攻撃的な言葉があふれ、人の心は益々すさんでいきます。歴史が繰り返してきた、「教訓」は目の前の「危機」に、あっさり忘れ去られてしまうのでしょうか。



令和に入り、昭和前期の「戦争の時代」はすでに歴史上の出来事となり、体験として語り伝えていくことが困難になりつつあります。歴史に学ばない人間を「コロナウイルス」があざ笑っているかのようにさえ思えてしまいます。

コロナ禍の2学期です。この2学期も気を引き締めて「新しい生活習慣」を実践していきたいと思います。保護者の皆様、地域の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。